

---

ケイン神王国召喚  
天津飯

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ケイン神王国召喚

### 【作者名】

天津飯

### 【あらすじ】

グラ・バルカス帝国の消えた未来のユグドからケイン神王国が召喚されたという話です。この小説は独自解釈を多分に含んでいます。

昭和十九年、中ノ鳥島

昭和十九年十月、「轟撃沈 航空母艦1隻 戦艦2隻 巡洋艦3隻 巡洋艦若は駆逐艦1隻：」というラジオの音が嫌に響く山を穿った巨大な坑道の中で、数十人の兵士達が青白く光るリンク状の装置を取り囲んでいた。坑道内の発動機から電気を受け取ったリングが回転を始めると共に兵士の一人でありながらもとっくに停限年齢に達しているであろう顔に深い皺が刻まれた白髪の老人が口を開く。

「畝傍艦の神隠し説発案以降、三半世紀に渡ってこの海軍技術研究所中ノ鳥島分室で行われてきた太陽神の使い計画が漸く身を結ぶ。大東亜戦争の戦局悪化によって目的は新天地への到達から異世界における皇国の建国と将来的な米国打倒となったが人類が地球という檻から出る初めての機会である事に変わりはない。瀕死の危機にある皇国の再興は我々の手に有る。しかしもしこの島の転移する先が我々の住めない環境であった場合、我々は何も果たせず窒息死するかもしれない。そんな計画に最後まで付き合う事を決めてくれた君達に感謝する。」

その言葉と共に目の前が真っ黒な光で埋め尽くされ吐き気や眩暈、睡魔といった症状に襲われ、知覚が消えていく。

温泉卵のような匂いを感じながら目を覚ますと青白く光っていたリング状の装置は輝きを失っていた。異世界への移動にしたのかとも思ったがしかし先に目を覚ました他の兵士達の表情は暗い。

「移動は失敗したのか…？」

兵士にそう投げかけると

「成功はしました：しかし大気中に地球の300倍以上の気相過酸化水素が含まれています。つまり、我々の生きていける環境ではありません。」

「そうか：ここで分室を解散する。」

各兵は自ら活路を見出して活動するように、と言おうとした所で近くの兵士に止められる。

「我々はこうなる事も覚悟してましたよ。今まで研究者として働いてきたんですから最後まで軍人らしい事をさせてくださいな。」その言葉と共に坑道内にいた兵士達が輪になり肩を組み始め、最近有名になった「同期の桜」を歌い始める。

歳の差による隔たりが消えて仲間となった事が感じれる心地よい感覚を感じながら兵達は一人一人倒れていった。

地球から消えた中ノ鳥島はユグド歴1900年にグラ・バルカス第七帝国の通報艦によって発見されるまで再び姿を消す事になる。

## 新技術

ユグド歴1900年、進水したばかりの新型通報艦ムジカは第七帝國本土北部の領海を航行していた。領海ながら普段船の通らない海域である為、艦長のツアスリは気を抜く事が出来ずにいたものの午後1時を回ると食堂で昼食を取った事もあり少しだけ気を抜いていた。コーヒ―を淹れるのが趣味の部下が淹れたコーヒ―を飲んでみると壁に備え付けられた伝声管から

「前方二〇度、陸地確認！」

と見張りを行っていた下士官の声がする。しかし、艦橋に広げられた海図にはこの海域に島なんて記されていない。

未記載の島？幾ら何でも未だ発見されてないという事もないだろうと思いつつ号令を行う。

「上陸して測量を行う。両舷停止！」

ムジカが島から少し離れた海域に停船すると蒸気カッターが下ろされ、測量班に選ばれた船員達が島へ向かっていった。2km程度の典型的な岩島だが島の中心部には山の様に盛り上がった地形が存在しており遠くからでも目立つ為これまで見つからなかった事が不思議である。

隊員達が疑問に思いつつながら測量を続けていると海岸線の岩陰で

「軍事施設ニツキ立入禁止」

という記号が彫られた鋼鉄製の扉を発見する。

「これ…何語だ？というかここに人がいるのか？」

そんな疑問だけが湧き出てくる。測量班の中で唯一下士官である為、拳銃を持っていた隊長を先頭に扉の中にあつた坑道を進んでいく。天井に残されている照明装置は輝きを失っているものどこからか入ってきた日光が坑道内を照らしている。

その明かりを頼りに奥へ進んでいくと一段明るい格納庫の様な広間に出た。その広間では大小2, 3種類程度の大きな機械が並べられている。

「なんだこれ…自動車？」

「いや、車輪が付いているし自動車の様にも見えるがこんな訳の分からない形にする必要はないだろう。」

「その坂になる様に削られた岩の上に有る大きな出口から空に飛び立てそうだな。今世界中で作られてる飛行機か何かか？」

「分からないが調査はここまでで大丈夫だろう。我々の知識ではここに有る物を理解する事は出来ない。」

その後、この島はマルカブ島と名付けられ一般人の侵入を防ぐ名目に王室属領に指定された。

そして優秀な軍属の技術者達と、情報流出の防止を兼ねて含められたムジカ乗員によって構成される調査隊が再度行なった調査ではこの島が異世界の日本海軍（読み方は不明）という軍隊の基地らしい事が判明。島から回収された現代の技術から半世紀近く先の技術で作られた兵器や書かれた設計図も言語と共に解析した結果、第七帝国の技術でも工作精度を強化すればぎりぎり製造出来る範疇である事が判明。カレンダーから判明した数字を元に最も技術レベルが近いと判断された八九式中戦車という戦車を元にハヴォック中戦車が開発された。

「自走出来る大砲の様にも思えたがそれにしては装甲が厚い様にも  
思える。これは前線で相手を撃つ事を目的とした：それこそ竜騎兵  
の未来の姿と言えるのではないだろうか？」

「確かにそれなら装甲が付いている説明はつく。最近の騎兵は連発  
砲による制圧射撃で接敵する前にやられてしまう事も多くなってい  
ると聞くとし実戦に投入すれば有力な兵器となるだろう。」

「しかし、現在の帝国の技術では1両作るのでも大変だしそれなり  
にコストがかかってしまう。技術的には生産が可能なのだからまず  
は工業基盤を整える所から始めるべきだと陛下に上奏しよう。」

## 冬戦争

グラ・バスカル帝国の存在するヨルパン地区やケイン神王国の存在するアルメニ地区の国々によってユグド歴18世紀末頃から行われ始めたアルフリー地区への入植は諸外国に多大な影響をもたらすと同時に植民地を国々が奪い合う戦争すらもたらした。特に金鉱石が取れたり石油の湧いたりする地域ではヨルパン・アルメニからやってきた移民とその母国である筈の国の軍隊が争うなんてこともあったという。

そんな地域の1つがアルフリーの南端に置かれた南ベムニアである。この地域は当初、ヨルパン・アルメニからはかなり離れた場所に有る割に特にこれといった資源も取れない荒野が広がっただけの価値の無い土地と考えられていた為、一応領有していたルヴァニア王国の流刑地同然に扱われていた。

しかしユグド歴1881年に大規模な金鉱山が発見されると評価は反転。

一発逆転を狙える新天地としてルヴァニア王国の国民を始めとする人々が殺到しついにトランスベムニア共和国の建国に至った。

ルヴァニア王国政府は

「そんな国家は存在しない」

として無視していたもののトランスベムニア人によるルヴァニア王国軍や国営の金鉱山への襲撃が始まると無視を続ける事も出来ず、暴動の鎮圧として王国軍を派遣するに至ったものの騎兵中心の王国

軍は連射砲（いわゆるガトリング砲）で武装した共和国軍とは相性が悪く当時の王国軍の指揮官であるメアリー少将の戦死を機に1868年に停戦という形でその独立を認めていたものの、面子を潰された王国軍はトランスベムニア共和国の鎮圧を諦めずユグド歴1906年12月1日に宣戦布告。

この戦争は、前回の戦争の経験から大砲を主要な装備とする王国軍の勝利に終わると予想されたが王国の勢力拡大を良しとしないグラ・バスカル第七帝国、ケイン神王国が義勇兵という形で軍隊を派遣。それに呼応しルヴァニア王国の友好国や同盟国、植民地等もトランスベムニアに義勇兵や軍隊を派遣した事により冬戦争が始まった。

そんな世界各国の多種多様な軍隊が争う戦場で一際異様な集団がいた。抗ルヴァニア・オレンジ義勇軍、グラ・バスカル帝国の事実上の義勇兵である。

皇太子グラルクスが自ら義勇兵の指揮官として参戦している事も異様であったのだが、それ以上にこれまでに見た事のない兵器を操る姿が異様さを際立たせた。

彼らがハヴォック中戦車と呼ぶ、馬より大きな車体の上に口径5cm程度の主砲を載せたそれは見た目こそ強そうだが荒野では一般人が走るのと同じぐらいの速度でしか動かず、主砲もあまり大きくない。

擲揄い交じりに

「馬を貸してやろうか？」

と言葉を掛けていたが戦闘が始まるとその評価は一転。遠方の丘から放たれるルヴァニア王国軍の榴弾砲の3・7インチ弾が降り注ぎ爆炎が草原を薙ぐ環境で他国の軍隊は進む事が出来なにか、出来ても直ぐに吹き飛ばされるか得手も足も出なかった。しかし、抗ルヴァニア・オレンジ義勇軍のハウオックはその装甲で榴弾の破片を弾き、その主砲と無限軌道で敵を蹂躪した。

それどころか、どこからか飛んできた鉄の鳥（後で聞くと今世界中で開発されている飛行機らしい）は遠くの榴弾砲陣地を爆弾で吹き飛ばし、榴弾砲の攻撃が消えたらハウオックに加勢し弾丸でルヴァニア王国軍の兵士をバラバラにしている。

その光景を見た他国の兵士達は興奮と、わずかな恐怖が宿った瞳で「この力を、祖国が手に出来たなら…」と溢したという。

## 建艦競争

冬戦争の終結から3年、冬戦争時に指揮官を務めていた皇太子グラ  
ルークスが皇帝に即位すると抗ルヴァニア・オレンジ義勇軍もとい  
グラ・バスカル帝国軍が使用したハヴォックや飛行機といった新兵  
器を使い第七帝国建国後も帝国領となっていた領土、いわゆる未回  
収のグラ・バスカルを回収した。

中ノ鳥島から得た技術により未回収のグラ・バスカルの生活水準を  
格段に向上させたグラルークスはそれらの功績より

「他国より格段に技術力の高いグラ・バルカス帝国が統治する地域  
の生活水準は格段に向上する。だから帝国は全世界を統治される義  
務を持つ。」

という選民思想を国是とする第八帝国の建国を宣言、これまでのヨ  
ルパン諸国からの遅れを巻き返すかのように発展途上国の植民地化  
を始めた。

他国もそれを指を咥えて見ているわけではなく、冬戦争で負けたル  
ヴァニア王国によるメアリー1戦車の開発を皮切りに見様見真似で  
第八帝国に対抗出来る兵器の開発を開始。

ケイン神王国もその例外ではなくエノク軽戦車やエノシュ戦闘機を  
開発していた。そんな諸外国が最も注力したのは海上戦力、特に冬  
戦争の際に主砲でルヴァニア王国政府の兵士を吹き飛ばしたグラ・  
バスカル帝国のオリオン級戦艦の様な戦艦である。

12インチを超える背負式配置の主砲を船体の中心線上に配置する事を基本とする新基準戦艦―後に超才級戦艦と呼ばれる様になる―の有用性は冬戦争で明らかになっており、しかも戦車や航空機とは違い概念的にも技術的にも理解出来る範疇であった為、予算も出やすかったのだ。そんな世界の動きをケイン神王国は黙って見ていたわけではない。

大聖堂の鐘の音が鳴り響く神王国の朝、斧によって支綱が切断されると共に発射された紙ふぶきや紙テープが降り注ぐ中、乾舷に金色の飾りが施された薄い灰色の軍艦が鎮座していた船渠から海に放たれた。

神王国初の超才級戦艦、アルパクシャドである。

全長222m、全幅33m、40cm3連装砲3基9門。

造船監督官を始め、他国の超才級戦艦の就役によるイニシアチブ低下を憂っていた神王国海軍関係者はその姿に拍手喝采を送っていた。その余韻の残る翌日、ケイン神王国に1つの情報が到着した。

「ルヴァニアの皇太子が殺害された!?」

## サレーオ暗殺事件

ユグド歴1909年5月11日、その日、ルヴァニアの皇太子キャロル・アドラム・ド・ルヴァニアはヨルパン地区の東方、サレーオに上陸した。

抗ルヴァニア・オレンジ義勇軍と名乗るグラ・バスカル帝国の圧倒的な技術力を背景とする強力な兵器によってそれまでアルフリー地区のみならず、アルメニ地区の南部、更にはアルメニ地区よりも東方にまでその版図を広げていたルヴァニア王国が敗北した冬戦争以降も、ルヴァニアは肥大化した内需を満たせる市場を欲していた。

しかし、今や惑星ユグドの殆どが植民地としてヨルパン・アルメニ両地区の優等国の領土に組み込まれている。ルヴァニア王国内閣内では武力によって既に他国の植民地となっている地域を自国に組み込む等と案も検討されたが、ただでさえ冬戦争によって支持率が低下している今戦争を始めた場合、敗北どころか泥沼化するだけでも内閣が消えかねない。

そこで、ルヴァニア王国が選択したのはヨルパン地区の中でも国力の低い国々の経済植民地化である。その第一歩として皇太子キャロル・アドラム・ド・ルヴァニアはヨルパン東方開発協定を調印する為このサレーオにやって来た。

ルヴァニアは資金を提供し、鉄道を建設する。サレーオは土地と労働力を提供し、利益を分かち合う。文面は平等であり、条文は柔ら

かく、そこには侵略の影など微塵も存在しないように見えた。しかし、鉄道はサレーオの首都から内陸へ、さらに鉱山地帯を貫き、最終的にこの港へと収束するよう設計されている。鉄鉱石、希少鉱物、穀物。全てがこの港へ集められ、ルヴァニア本国へと送り出される。一方でサレーオには、機械から繊維、日用品まで凡ゆるルヴァニア製の商品が持ち込まれるだろう。

その結果、サレーオの第二次産業は壊滅し、購買力を失った労働者は第三次産業の衰退すらも引き起こしかねない。更にそれによるサレーオの税収減は低利融資として提供された鉄道の建設費の返済にも影響を与えるだろう。サレーオの財政規模を考えれば、いずれ破綻することは明白である。破綻した時、何が起きるか。協定の付属条項には、こう記されている。

1. 返済不能の場合、鉄道運営権はルヴァニア王国に移管される。
2. ルヴァニア王国は必要に応じて治安維持のための人員駐留を認める。

無論、その実態を理解していた者は少なくなかった。キャロル・アドラム・ド・ルヴァニアの乗艦とその警護を目的とするルヴァニア王国海軍艦隊による砲艦外交に屈したサレーオ政府の官僚を始め、港湾に整列した儀仗兵を指揮するサレーオ警察のキャリア官僚まで

：

キャロル・アドラム・ド・ルヴァニアの御召艦に選出されたルヴァニアの超才級戦艦、ライオンのタラップがサレーオに降ろされ、測量技師や鉄道官僚、金融家に囲まれながらキャロル・アドラム・ド

・ルヴァニアが一步一步踏み出していく。

港の端々から無邪気に歓迎する市民に対するポーズとして、キャロル・アドラム・ド・ルヴァニアが片腕を振り上げた時事件は起こった。

サレオ警察のSPの1人が儀仗用のサーベルを振り上げながら皇太子に迫る。

皇太子の近衛兵達も対応する為皇太子に近付いていく。

しかし、細長いタラップにいる皇太子に近づく為にはその周りを囲む測量技師や鉄道官僚、金融家を超えなければならない。

彼らを押し除け、近衛兵の1人が皇太子の肩に手を掛けると同時にサーベルが振り下ろされる。

暗い影がタラップの上に落ちた。サーベルの刃は、皇太子キャロル・アドラム・ド・ルヴァニアの左肩から鎖骨にかけて深々と食い込んだ。鮮血が白い軍服を一瞬で赤く染め、甲板に飛び散る。

「——っ！」

皇太子の口から短い呻きが漏れたが、すぐに唇を噛み締めて声を殺した。幼い頃から叩き込まれた王族の矜持が、痛みよりも先に自らに「叫ぶな」と命じている。

測量技師の一人が悲鳴を上げ、金融家が後ずさって転倒する。狭いタラップの上で人々がもつれ合い、近衛兵等は必死に前へ押し寄せようとするが、逆に動きを阻害していた。

サレーオ警察のSPは、既に二撃目を振り上げていた。

「ルヴァニアの犬が！ この国を売るな！」

叫びながら、二撃目が振り下ろされる。しかし今度は、近衛兵の一人がようやく皇太子の体を後ろへ引き倒した。

サーベルは皇太子の右腕をかすめ、軍服の袖を裂いただけだった。続く男の三撃目も空を切り、勢い余ってバランスを崩す。

ようやくタラップの下からルヴァニア海軍の水兵たちが殺到した。

銃声が響く。SPの胸に二発の弾丸が命中し、男は甲板に崩れ落ちた。サーベルが乾いた音を立てて転がる。

キャロルはタラップの上に半ば倒れ込みながら、左手を自分の肩に押し当てていた。血が指の間から溢れ、滴り落ちる。

「……次官」

掠れた声で、すぐ傍にいたルヴァニア外務省事務次官を呼ぶ。

「はい、殿下！」

皇太子は痛みを耐えながら、ゆっくりと立ち上がろうとした。近衛兵が慌てて支える。彼は一瞬、言葉を切り、港に整列したまま硬直しているサレーオの儀仗兵たちを見渡した。彼らの顔には、恐怖と、隠しきれない安堵が混じっている。

「……この一件を、サレーオに、ルヴァニア海軍の治安維持部隊を常駐させる口実にしてくれ」

そう言い残すと、キャロルは再び右手を振り上げ、そしてタラップから落ちた。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~31179](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~31179)

---

ケイン神王国召喚

2026年04月06日 05時00分発行